報告タイトル（＊日本語と英語両方ご記入ください）

「清末内陸市場における山西票号の金融活動に関する研究

―『日昇昌』票号の金融ネットワークを中心に」―

A Study About the Financial Activity of ShanXi Piaohao at Inland Market in Late Qing Dynasty -- Focusing on the Economic Network of Rishengchang Piaohao

氏名（所属）

孫盈盈

大阪産業大学

要旨（800 字程度）

山西商人は中国の近世において代表的な商人グループである。そのビジネスの特徴は、専権的に政府にかかわる商業活動を行い、清王朝の委託業務を多く引き受けるという点が多く指摘されていた。しかしながら、その金融業の中核をなす山西票号は、時代や地域によって果たす金融機能が限定されたとはいえ、雑種幣制下の清末期においては、唯一全国ネットワークをもつ金融機関として、地域をまたぐ商品の流通及び資金融通においても大きな影響力を持っていたのである。そのため、清末期における開港地と内陸地域の大口貿易が滞りなく行われたことから、山西票号が果たす地域間決済の機能にも注目すべきである。

時代的に山西票号がいち早く開港地に進出し、19 世紀前半から中国進出間もない外資銀行との結びつけを通じ、内外貿易の決済機能において決定的な役割を果たした。19 世紀後半に入ると、中心都市における金融業の勃発によって、山西票号がもつ地域間の決済機能が衰退していた。他方、内陸の非中心都市においては、金融取引の限界コストが高く、山西票号がもつ地域間決済機能がより重要視された。本研究は山西票号の代表的な事例である「日昇昌票号」の全国ネットワークを研究対象として、中心都市と非中心都市間における金融取引の実態整理を通じ、内陸市場における山西票号の役割を再評価する。

本研究では、まず、1890 年から 1900 年までの日昇昌票号の書簡から各分号間の取引を整理しつつ、各地拠点の間の取引規模及び国内貿易における山西票号の位置づけを考察する。そして、国内貿易の商品流通ルートに従い、各ルートにおける日昇昌票号各分号が手掛ける金融活動を取り上げる。さらに、日昇昌票号の経営文書を解析した結果を踏まえ、日昇昌票号各分号の経営実態から、国内貿易と伴って変化する山西票号の経営構造の変容を明らかにする。最後に、以上の考察を統合して清末期における中国国内貿易において、山西票号が果たした役割を再整理してまとめとする。